

「ここに丘あり」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 春風や闘志いだきて丘に立つ

本校第17代校長の溝口繁美先生は長い期間、教育委員会で勤められたあと、校長として阪神間の県立学校に赴任されました。生徒達はもちろん、先生方のことも大切にされながら働いておりましたが、やがて教育委員会に戻ってこれ、上司として様々なことを私たち後輩に教えてくださいました。とても頼りになる先輩。その方が再び校長となり、学校に戻られることとなりました。その行く先が神戸高校でした。

その4月1日のことを私は今も忘れないでいます。県立学校の校長代表として多くの人々を前にした溝口先生はご自身の心境を冒頭タイトルに掲げた高浜虚子の句に喩えられ、声を震わせながら語られたのです。

虚子は明治の終わり頃、俳句から距離を置き、小説を執筆することに没頭していました。しかし、この頃、河東碧梧桐が新しい俳句を提唱したのですが、それは俳句の定型を壊し、季題を無用とする傾向に傾いていました。このことに危機感を抱いた虚子は俳句の伝統を護りたいとの思いから、この句とともに闘志を抱いて、俳壇に復帰したのです。「溝口先生にも様々な思いがあるのだろうな」若輩者だった私はその姿に心を打たれながらも、真意は測ることができませんでした。ただ、お気持ちの昂ぶりだけが痛いほど伝わりました。

さて、私たちの学び舎は上野が丘に聳えています。正門を出れば、そこは丘の上。虚子のように、あるいは溝口先生のように何らかの思いを抱え、闘志に満ちた一步を踏み出すことが可能です。あらたな学年を前にして、あなたは何を決意しますか。皆さんにそんな時間があればいいな、そう期待してしまいます。せつかく丘の上で学んでいるのですから。



さて、出会いの春を前に別れの春あり。78回生の先輩方が過日、この学び舎を離れていきました。クラスメイトとは離れ離れになることがあります。担任の先生も変わる可能性があります。まして、私たち教職員は教育公務員ですから転勤もあり、退職もあります。そのため皆さんにとっては部活動や自治会、委員会の先生ともお別れとなることがあります。どうか「ありがとう」だけは伝えられますように。

ふと見下ろすとグラウンドに運動部員の姿。学力検査のためにしばらく部活動を中止していましたが、いよいよ再開です。この間を利用し、砂埃が舞いにくく水はけのよい真砂土を補充しましたが、皆でならしてくれました。春到来の準備万端です。



思えば私も、働きだしてから37回目の春を迎えることになります。随分と時間が経過しましたが、その前年の自分の言動を反省しなかったことなど、残念ながら一度もありません。



担任をして、結局は原級留置となってしまった生徒を見送った春があります。さんざん鍛えてくれた先輩と仲違いをしてしまい、謝れないままに先立たれてしまった春もあります。すべては自身の未熟さゆえですが、切ない春をいくつも数えました。もちろん、この1年も至らないところは多々あったように思いますが、皆さんのお蔭で「やりきった」感だけはそれなりにある春です。この『校長の窓』も毎週更新することができましたね。

さあ、本日の終業式を終えると、私も皆さんも新たな1年のための助走が始まります。走幅跳で遠くへ跳ぶためには、①助走は肩の力みを抜いて、気持ちの良いリズムを刻むこと ②助走板を踏み切際には軽く沈み込み、踏切足にバネを溜めこむこと ③踏み切ったら、遠くを見つめて大きく空に駆け上がることだけを意識すること が大切と思った私は、自身もそんなふうには跳び、生徒にもずっとそう伝えてきました。後悔のない1年をめざし、お互いにいい助走をして、それぞれの4月を気持ちよく迎えられますように。